

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24792543

研究課題名(和文)在宅精神障害者の家族介護者の首尾一貫感覚に焦点をあてた家族援助モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of Family Support Model with a Focus on Sense of Coherence in Family Caregivers of Persons with Mental Illnesses Living in the Community

研究代表者

坂井 郁恵 (SAKAI, Ikue)

山梨大学・医学工学総合研究部・助教

研究者番号：10404815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在宅精神障害者の家族介護者のストレス対処能力(SOC)を明らかにするために質問紙調査と個別面接調査を実施した。調査の結果、家族介護者のSOC得点は、対象と同様の年齢や状況にある人々を対象に行われた先行研究の結果よりも低値を示し、本研究の対象者は家族介護者群と対照群ともに低いSOC状態にあると考えられた。家族介護者のSOCを高めるものとして、年齢や患者と過ごす時間の長さに加え、介護や日々の生活を支える他者の存在が重要であると考えられた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to identify actual of and factors related to SOC in family caregivers of community-dwelling mentally disabled people. And it consists of the questionnaire survey and personal interview.

There was no difference found in the total SOC scores and the scores of each subscale between the family caregiver group and the control group. Compared to previous studies on subjects in the same age group and in the same situation, the SOC scores of the subjects of the present study were lower in both the family caregiver group and the control group. Age, duration of living with the patient, time spent together, the presence of other people helping with nursing care, and the diversity of supporters are all considered to be factors influencing the SOC of family caregivers.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・精神看護学・地域看護学

キーワード：家族介護者 在宅精神障害者 Sense of Coherence 家族支援

1. 研究開始当初の背景

我が国の精神保健福祉施策は、病院での入院中心の医療から、地域での生活を中心とした医療へと重点を変えている中、多くの在宅精神障害者が家族と暮らしている。地域での精神科医療においては、介護の担い手として家族の役割が早くから注目され¹⁾、在宅精神障害者のケアは家族の手に委ねられている現状がある。一方、家族は重要な介護者であるにも関わらず、疾患や療養について十分な情報をもっているとは言い難い。在宅ケアを担う要因として家族の役割は大きい²⁾が、ともすると家族は、身体的・精神的負担感を抱えやすく、介護によるストレスは極めて大きい³⁾。家族介護者が、長期にわたる介護を続けていくためには、介護者自身の健康を維持することが必要であり⁴⁾、闘病中の者が家族内に存在する場合、その家族の生活の質が保障され、且つ家族が介護を価値ある行為と認識した上で長期ケアが継続できるような方法を検討することが求められる⁴⁾。

そこで本研究では、Sense of Coherence (SOC) 概念に着眼した。これは、ストレスに上手く対処し、健康を守り、更にそれを成長・健康増進の機会や糧に変え、明るく前向きに生きていくことを可能とする力(ストレス対処能力)を意味する⁵⁾。SOC が家族介護者のメンタルヘルスに与える影響並びに、家族自身の力と他者からの力がそれぞれ SOC に与える影響を明らかにすることで、地域精神看護の方策に SOC の向上という視点や働きかけを加えることができる。家族の潜在能力に注目し、それを維持・向上させることができる援助を実践できたならば、地域における家族看護のケアの幅を広げ、またケアの質を高めることにつながるであろう。

文献

- 1) 酒井佳永, 金吉晴 (2002): 精神分裂病者の家族負担に関する研究, 精神医学, 44(10), 1087-1094.
- 2) 横倉聡 (1999): 現代的ストレスの課題と対応「少子高齢化社会とストレス」, 至文堂,

21-25, 東京.

3) 水野恵理子 (2003): 在宅における家族介護者への心理教育的プログラムの実践, こころの看護学, 4(1), 155-160.

4) 野川とも江 (2000): 介護家族の QOL, 中央法規出版, 東京.

5) 戸ヶ里泰典, 小手森麗華, 山崎喜比古, 他 4 名 (2009): 高校生における Sense of Coherence(SOC)の関連要因の検討 - 小・中・高の学校

生活各側面の回顧的評価と SOC の 10 ヶ月間の変化パターンとの関連性 -, 日本健康教育学会誌, 17(2), 71-86.

2. 研究の目的

本研究は、Sense of Coherence (SOC: ストレス対処能力) 概念に着目し、精神障害者の在宅家族介護者がもつ SOC が家族介護者自身のメンタルヘルスに与える影響ならびに、家族自身もつ力と他者から与えられる支援がそれぞれ SOC に与える影響を明らかにする。そして、地域精神看護において家族介護者の SOC の向上という視点を加えた家族援助モデルを構築するための一助とすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、SOC 尺度を用いた質問紙調査および家族介護者に対する個別面接調査を実施した。

(1) 自記式質問紙調査

対象者: 精神障害者と同居している家族で、在宅援助における中心的役割、あるいはキーパーソンの立場をとっている家族介護者 129 名と、比較対照群として地域で暮らす一般住民 46 名。

方法: 性別, 年齢, 精神障害者との続柄, 家族構成等, 属性に関する質問項目のほか, SOC (Sense of Coherence) -13 日本語版, 成人用一般的 Locus of Control 尺度, 情緒的支援ネットワーク尺度, 精神的健康パターン診断検査の 4 尺度を使用した。

分析: SPSS 統計ソフトを用い, 各尺度の項

目得点と総得点の平均値，中央値，標準偏差を求め，多変量解析を行い，各尺度間の関連を検討した．また，基本属性と各尺度得点との関連を検討した．

(2)個別面接調査

対象者：質問紙調査協力者のうち，面接調査への協力にも承諾の得られた者 24 名．

方法：SOC を育む 3 種の感覚「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」と「これまで体験した辛い体験」に関する具体的な体験や感情，思いを尋ねる内容を質問項目とし，個別面接によってデータを収集した．

面接の際，対象者の許可が得られた場合は面接内容を IC レコーダーに録音した．

分析：分析に先駆け面接ガイドの質問内容で研究者が意図する内容の語りが得られるか再度検討し，質問内容の妥当性を吟味した．面接内容は全て逐語録にし，「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」と「これまで体験した辛い体験」に対してコード，サブカテゴリ，カテゴリへと抽象化を行なう中，複数の研究者で検討を繰り返し真実性の確保に努めた．

質問紙調査と面接調査の分析結果から，在宅精神障害者の家族介護者がもつ SOC の実態や関連要因を明らかにし，家族介護者に必要な援助について考察した．

(3)倫理的配慮

山梨大学医学部倫理委員会の承諾を得て実施した．また，調査協力病院と施設，対象者に対し，研究の主旨，調査内容，方法を文書と口頭で説明し，調査へ承諾と協力を得た．

4. 研究成果

(1)自記式質問紙調査

家族介護者群と対照群の SOC 得点に有意差は認められなかった (SOC 合計：家族介護者群 55.7 ± 11.8 ，対照群 55.2 ± 12.1)．家族介護者群は，年齢と SOC 合計，把握可能感，処理可能感，有意味感との間に相関を認めた．

また，介護を支える他者の種類の多さが有意味感と，把握可能感は精神障害者との同居期間や一緒に過ごす時間との間に正の相関を認めた．介護を支える他者の存在の有無の 2 群間比較では SOC 合計 ($p=0.025$) と有意味感 ($p=0.015$) に有意差を認めた．重回帰分析では，家族介護者の SOC に影響する要因は心理的ストレス，年齢，QOL，LOC であり，これらの要因が高まると SOC は高くなることが明らかになった．MHP 尺度は SOC と負 (ストレス関連項目) とは正 (QOL 関連項目) の相関が認められ，SOC の高さがメンタルヘルスの良好さと関連していることが明らかになった．SOC と LOC との間には，弱～中程度の相関を認めたが，情緒的支援ネットワーク尺度と SOC との間では，有意味感とのみ弱い正の相関を認めた．

(2)個別面接調査

全ての家族介護者が，これまでの辛い体験として【家族員の精神疾患の発病】を挙げた．家族介護者は，介護生活の中で【状況把握の難しさ】や【生活の見通し】のなさを感じ，自分の置かれている状況の把握は不安を伴うものだった．しかし，【試行錯誤】を繰り返す中で，患者や介護に対する【気持ちの持ち方】を変化させ，【他者の存在と関わり】から力をもらい自分なりの対処方法を習得した者も多く，患者や家族等との関わりを通してこれまでの生活に【意義や価値の獲得】を行っていた．一方で，介護の終わりが見えない中，【生活や介護への不全感】や【生活の見通し】のなさを感じている者もいた．

以上の結果から，家族介護者と対照群の SOC 得点はほぼ同じであり，両者の SOC 得点は先行研究での結果よりも低値を示し，本研究の対象者は低い SOC 状態にあると考えられた．家族介護者の SOC を高めるものとして，年齢や患者と過ごす時間の長さに加え，介護や日々の生活を支える他者の存在が重要で

あると考えられた。さらに、その他者が多様であることは、有意味感を高める可能性が示唆された。

支援者の存在を家族介護者が認識できるように働きかけるとともに他家族員や地域住民の精神疾患への理解を深めることは、家族介護者の汎抵抗資源を増やし、SOC の形成・強化につながると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

坂井郁恵、在宅精神障害者の家族介護者の生活体験から捉える Sense of Coherence (SOC)、日本看護研究学会第40回学術集会、2014年8月23日(採択済)、奈良県奈良市奈良県文化会館。

坂井郁恵、精神障害者の家族介護者が持つSOCの特徴とその影響要因に関する研究、第33回日本看護科学学会学術集会、2013年12月7日、大阪府大阪市大阪国際会議場。

坂井郁恵、在宅精神障害者の家族介護者の首尾一貫感覚(Sense of Coherence: SOC)に影響を与える要因の検討、第32回日本看護科学学会学術集会、2012年11月30日、東京都千代田区東京国際フォーラム。

6. 研究組織

(1)研究代表者

坂井 郁恵 (SAKAI, Ikue)

山梨大学・医学工学総合研究部・助教

研究者番号: 10404815